

ロシア留学報告書

情報文化学科 2年 青木弘文

1. はじめに

大学入学当初はまさか自分がロシア留学へ行くということなど考えてもいなかった。そんな私がロシアに興味を持ち始めたのは、地域研究概論の講義を受けているときだった。アメリカ、韓国、中国の歴史や文化などは以前から少しは知っていたが、ロシアについては何一つ知らなかった。そこで、あえて無知のロシアを勉強してみようと考えた。そして、その勢いそのまま留学も本格的に検討し始めた。地域選択は残りの学生生活を左右するほどの重要なものである。今思えば慎重な判断ではなかったと思うが、後悔はしていない。おそらく留学に行かなければ、アルバイト先と学校を行き来するだけの単調な日々になっていたろうから。

ロシアでの生活は私にとって一生の思い出になった。その4か月の体験を述べていきたいと思う。今年度は昨年度までの留学先であった極東連邦総合大学ではなく、ウラジオストク国立経済サービス大学に留学することになった。本レポートが来年度からロシア留学へ参加しようか悩んでいる学生のために少しでも参考になれば幸いである。

2. ロシアでの生活

1. 授業

最初の授業でプレースメントテストが行われ、私たち18人はそれぞれ6人ずつ3グループに分けられた。私は中国人、韓国人、フィリピン人の生徒と同じクラスだった。年齢も国籍もさまざまな彼らと4か月間と一緒に勉強することはとても新鮮だった。

授業は常に積極的に取り組む姿勢が求められた。最初は今まで日本で受けてきた授業の型から抜けることができず、一言も話さないまま1コマ終わることがよくあった。しかし、徐々に自分から発言できるようになった。そのきっかけを与えてくれたのは、同じクラスのフィリピン人のホセだった。彼はロシア語を学び始めて3カ月足らずにも関わらず、簡単な会話をすでにこなせるレベルにあった。授業中の彼の様子を見ていると、間違えることを恐れず、楽しみながら授業を受けているようだった。そのときに改めて語学を学ぶうえで大切なことに気づいた。ロシア語を話せるようになりたいのであれば、とにかく話すことが重要であり、そうしなければ相手に何も伝わらないということである。

授業では先生が「ロシアでは～だけど、あなたの国ではどうなの？」といった質問がされ、皆で自分たちの国の文化や歴史を紹介し合うことがよくあった。ロシアを学ぶのはもちろんのことだが、各国の留学生から実際に彼らの国の話を聞いたり、写真を見せてもらうことで、少しではあるが彼らがどのような地域に住み、生活しているのか身近な存在と

して感じる事ができた。こうした体験も留学の醍醐味であると思う。

留学当初はロシア人の先生は怖い人ばかりだろうなと勝手なイメージを持っていたが、皆親切で明るい先生ばかりだった。日本人と比較すると、声が大きく、リアクションも大きい。ときにはジョークを交えて話をしてくれた。授業で覚えるべき単語や文法には苦戦したが、期末テスト自体はそれ程難しいものではなかった。全授業日程が終了した後、先生方が送別会を開いてくれた。別れることが寂しかった。

私たち日本人は4か月の授業日程だったが、他の多くの外国人学生は引き続き授業を受け、1月以降も学校に通うようだった。できることなら、もう少し彼らと一緒に勉強がしたかった。



2. 日常生活

私たち18人は大学に併設されている学生寮で留学生活を送った。各部屋2人ずつ同じ国情生で誰も外国人と同じ部屋になることはなかった。これが自分にとっては良くも悪くもという感じだった。この点については後述する。

留学が始まってからは驚きの連続だった。最初に驚いたのは、部屋のシャワーのお湯が出なかったことである。一人がポットでお湯を沸かし、桶にお湯を入れる。もう一人がそれを使って体や頭を洗った。また、ネット環境が整っていないことを知らなかったため、申請手続きをするのにも時間がかかってしまった。さらに、ほぼ毎日出没するゴミブリには困り果てた。生活をするうえで欠かせないのが食料だが、私にとってはスーパーへ買い物に行くことすら嫌だった。レジの店員は日本人の店員のように笑顔で接客をしない。商品も適当な感じで袋にボンボンと詰め込む。いつも細かいお金をせがまれ、常に小銭をつ

くるように心がけていた。しかし、時間が経つにつれ、こうしたことにも慣れていった。

休日や放課後は先生やロシア人の学生に連れられて、ウラジオストクの街を散策した。大学は街の中心部から少し離れたところに位置しているため、バスで移動することが多かった。バスの乗車賃は18ルーブルでどの距離でも一律だったため、どこか遠出するときは便利だった。街には映画館や博物館、市場、デパートなどがあった。これについては『留学体験レポート』で詳述したいと思う。

それ以外の日はスーパーへ買い出しに行くことが多かった。スーパーの店内には、日本製のお菓子やカップラーメン、洗剤などが多く見かけられた。先生が言うには、日本製品は質が良いが、高価と言っていた。確かに他の中国や韓国製品と比較すると、値段が高かった。そのため、留学中はほとんどこれらを買うことはなかった。その後夕食の準備をしたりしてあっという間に夜になり、宿題をこなして一日が終わっていった。

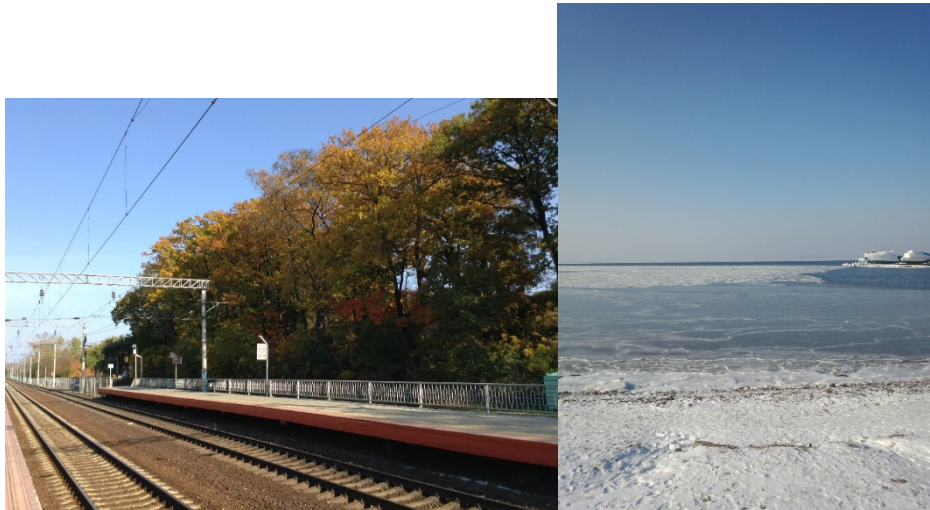
ここからは、部屋が日本人同士だったことで良かった点、悪かった点を考えてみたい。すでに述べたように最初は慣れないことばかりだったため、友人と一緒にの部屋だったのは助かった。また、今年度の留学生は18人で多かったこともあり、みんなと打ち解けるのに時間がかかった。生活に慣れてくると、夜な夜な部屋に集まってみんなで談笑し、管理人のおばさんに叱られることもしばしばあった。誰かが誕生日の日には、みんなで祝ったり、料理を作ったりした。振り返っても毎日が楽しくて、最高の仲間ができたと思う。

ただ、こうした環境に甘えすぎたのも事実である。授業が終われば、寮で友人と時間を過ごし、ロシア人や他の外国人との接触を避けてしまったことが多々あった。それは必然的にロシア語を話す機会を逃すことになっていた。もっと積極的に色々なひとと関わるべきだったと思う。

私が特に印象に残っていることは、ウラジオストクで働く日本人の方々と交流できたことである。実は私のクラスだけ、私たち以外の日本人女性の方が一人いた。彼女はすでにウラジオストクに滞在して1年程で、授業やロシアでの生活など多くのことを教えてくれた。彼女の夫は日本人で、ウラジオストクに転勤になったため、一緒に生活していると話していた。ある日、授業の休憩時間に私が高校生の硬式テニスをしていたと彼女に話したところ、今度一緒にやらないかと誘っていただいた。毎週休日になると、大学の体育館でテニスをしているようだった。約束した時間に体育館へ行くと、十人程の日本人の方々がいた。彼らも日本からウラジオストクへ派遣され、現地で働いているということだった。後からロシア人のコーチも参加し、簡単なロシア語を交えながら一緒に汗を流した。その後、そのうちの一人の男性のお宅へお邪魔させていただくことになった。その時気づいたのだが、彼は私たちが住む寮に併設されているマンションに住んでいた。そこには、他にも日本人が住んでいるようだったが、街中で会うことなかった。帰り際に「ロシア語がんばれ」と声をかけてもらった。それまでテレビで「異国で暮らす日本人」といった企画の番組を見て、自分には関係ないことだと思っていたが、こうした体験は私の語学学習のモチベーションの向上につながった。

3. 9月から12月の気候

9月のウラジオストクはまだ暑い。ハーフパンツやTシャツを着ていてちょうどよいくらいだ。日出日没は新潟と比べると、1時間から2時間程遅い。風はジメジメしておらず、冷たく感じる。10月頃から急に寒くなる日がある。防寒具の用意を早めに始めたほうが良いだろう。11月に入ると完全に冬になる。ロシア人にとっては暖かいと感じるようだが、体調に気を付ける必要がある。12月の初旬頃から雪が降り始め、町中の道路が凍結する。ウラジオストクは坂が多いため、危険な個所がたくさんある。当然、風も冷たく、痛いと感じる程だ。この時期特に大変なのは、食料品の買い出しである。寮から出ないと必要なものが買えないので、手袋、ブーツ、帽子、厚めのコートが必須である。また、新潟の天候と決定的に異なるのは、この4か月間はほとんど雨が降らないことである。ほぼ



毎日快晴なので傘をさすことがほとんどなかった。

4. おわりに

今までロシア語を一つも知らなかった私が、初めてロシア人、他の外国人とロシア語を通じてコミュニケーションを取れたときは、本当に嬉しかった。「こんにちは」と言うと「こんにちは」とただ一言返してくれるだけなのだが、それだけで言葉が通じるという自信が持てた。しかし、会話となると話したいことがあっても単語や文法の知識が足りず、あと一歩踏み込んだ内容の会話ができれば距離が縮まりそうなのと思うことが何度もあった。これからもこの悔しさを忘れずに勉強に励みたいと思う。

また、もう一つ個人的に反省するべき点として考えられるのは、あまりにも自分が他国について無知だったということである。上述したように授業ではロシア以外の各国の文化や歴史を話し合う時間があった。同じクラスの中国人や韓国人、フィリピン人の学生は日本語や日本のアニメ、観光名所などを良く知っていたが、私はほとんど彼らの国のことを知らなかった。自分の国に興味を持ってもらうことはとても誇らしく、嬉しいことだと思う。しかし、それが一方的な形になってしまっはいけない。互いを知ることこそが国際

交流だからだ。これは人間関係にも同様のことが言えるだろう。今後は相手の立場にたつて物事を考えられるように意識していきたい。

振り返ると、楽しいことばかりではなかったが、ロシアの派遣留学に参加できたことは本当に恵まれたことだったと改めて思う。インターネットやテレビでは感じることはできない世界を体験することができたからだ。その他にも文章では伝えることができないほどの感動があった。このような貴重な体験を与えてくれた家族、友人、先生方、現地での生活をサポートしてくださった森さんには深く感謝しなければならない。

